

令和元年度学校評価結果

学校経営の重点

- ① 安全安心に学べる学校づくり ② 子ども たちに力をつける指導、個々に細かく見つめる事例研究の充実 ③ キャリア教育・就労支援の充実 ④ 交流及び共同学習の推進
 ⑤ 訪問教育の充実 ⑥ 合理的配慮の提供を見据えた教育実践 ⑦ インクルーシブ教育システム構築を推進するためのセンター的機能の充実

※ 評価基準 4点(よくできている) 3点(できている) 2点(あまりできていない) 1点(できていない) 0点(わからない)

※ 達成状況 A判定(3.2以上)よく達成できた B判定(3.2未満～2.8以上)達成できた C判定(2.8未満～2.4以上)工夫・改善が必要である D判定(2.4未満)改善が必要である

領域	学校経営の重点	NO	分掌等	評価項目(本年度の実践目標)	自己評価(数値)	自己評価(達成状況)	保護者アンケート	総括(成果及び課題と改善策)	学校関係者評価
I 学校運営	①	1	総務	家庭や地域、関係機関への情報発信と教育活動の理解啓発を図るため、ホームページを1ヶ月に1回以上更新する。	3.1	B	A	各行事ごとにブログを更新することができた。新しくホームページの項目を追加し、作ることもできた。ページによっては、見にくいところや過去のあるので、編集が必要なページがある。	学校自己評価及び総括は適切である。 ・ホームページを一度見直し、整理して内容ごとにまとめるのもいいかと考える。その際は協力したい。 ・防災はとても難しい問題と考える。 ・南海トラフ大地震による津波対策は引き続き必要と考える。大学の防災の研究者に声をかけたい。 ・芦屋市自立支援協議会専門部会での関わりに感謝している。今後も芦屋市の障害福祉との関わり、助言をお願いしたい。 ・項目9については、地域支援センターの活動が保護者や地域(学校近隣)の方に余り知られていないのは残念である。芦特がセンター的機能を発揮し、地域に対してさまざまな支援をする中で得られたものを今度は芦特に持ち帰り、児童生徒の支援に役立てるとともに若い教員にも伝授していくことを願いたい。
				創立10周年を迎え、各部・PTAと連絡調整を密に行い、式典の開催や記念誌の発行を実施する。	3.5	A	各係の担当が各部、PTAと協力し、円滑に準備を進めることができた。当日は、芦特祭と同日であったが特に混乱はなく、肅々と式典を開催し、記念誌等の配布も行うことができた。		
		3	生徒指導	行方不明児童生徒に関する資料及び児童生徒証の作成について、仮想デスクトップでの作成に円滑に移行する。	3.1	B	概ね円滑に移行できた。次年度に向けて、転送用ファイルと児童生徒証の写真枠の大きさの統一、各学年会に配付した作成手順の資料の修正と新たに児童生徒証作成マニュアルを整備した。		
				自力通学生(完全自力通学生・バス停自力通学生)の下校時の放課後等デイサービス利用について、利用届等の書類の整備を進める。	3.2	A	実施要項、利用届、保護者宛文書の原案を作成し、高等部の各学年に提案し意見を聴取して原案の修正を行い、書類の整備ができた。次年度から実施する。		
		5	保健	食物アレルギー等、給食で個別対応が必要な児童生徒に対して、細心の注意を払い安全に行う。	3.2	A	A	細心の注意を払っていてもヒヤリハットが起きてしまうことがあった。今後も改善策を考えて二重三重のチェック体制を取って安全に行っていきたい。	
		6	管理	定期的な安全点検、補修箇所や備品等への速やかな対応を行う。	3.1	B	A	破損報告書を改訂(12月)、教室見取り図に破損箇所を記入することで事務室への修理連絡がわかりやすくなった。安全点検を徹底し、破損報告の提出に早期対応を続けることで、職員が丁寧に物の管理や点検ができるように促す。	
				数年単位で使用できる新版の防災マニュアルを完成させ、児童生徒の安全に努める。	3.3	A	職員研修や職員会議で、防災マニュアルを使い危機管理体制について共通理解を図ることができた。福祉避難所の指定を受け、次年度は避難所としての役割について形を整え、全職員が共通理解できるよう基盤を作っていく。		
				車いす利用の児童生徒の避難・誘導を迅速に行う手立てを考え、年3回の避難訓練を行う。	3.2	A	A	避難訓練(11月・1月)では授業中の被害を想定して実施した。エレベータが使えない時、車椅子児童生徒の避難・誘導は体制が整いつつある。限られたスペースの中で安全で迅速な避難・誘導など、常に災害時はどう動くかを考えておく。	
		⑦	9	地域支援センター	地域支援のため、関係機関、教職員、保護者を対象にした学校見学会や教育フェスタを行う。高校通級サポート、センターHPの充実を図る。	3.2	A	B	

II	訪問教育	⑤	10	在宅訪問	個々のニーズに合わせた教育活動を推進するために、児童・生徒の実態把握につとめ、保護者、医療関係者との連携をはかる。	3.4	A		複数の目で実態把握を行い、個々に応じて主治医からの聞き取り、PTやST見学、支援会議を行った。ニーズに合わせて、スクーリングや居住地校交流も頻繁に行った。スクーリングや行事への参加が増えてきているので、校内での協力をよりお願いしたい。	学校自己評価及び総括は適切である。 ・少ないスタッフにも関わらず、本当に素晴らしい取り組みだと思う。次世代の教員への継承をぜひお願いしたい。
			11	砂子訪問	施設等の関係者や保護者との連携を深め、協力してスクーリングなどの様々な体験を行うことにより教育活動の充実を図る。	3.4	A		スクーリングでは、施設関係者との連携が深まり、児童生徒の健康状態等の情報を共有しながら、より有意義な交流を行い、生活の質の向上につなげることができた。今後は、保護者の参加も積極的に募り、連携の充実を図っていきたい。	
III	教育課程	②	12	教務	教科領域ごとの年間指導計画の作成および、授業を通して児童生徒が身につけたことが明確になる評価表の作成・集団編成を行う。	3.0	B		教科領域会で年間指導計画の回収率は昨年度より高かった。評価表に関しては、全学部で行った改良に向けてのアンケート結果を受け、来年度検討を行う。	学校自己評価及び総括は適切である。
			13		個別の指導計画の記載内容を充実させることを通して、授業づくりに生かしていけるシステムづくりに努める。	2.8	B		個別の指導計画の書式に関しても評価表と同じく内容や書式に関するアンケートを実施した。来年度、全校教育課程委員会で検討する。	・軽度の児童生徒が増えてきている実態を踏まえ、柔軟に対応できるような時間割のあり方やクラス編成について、今後時間をかけて取り組む必要がある。 ・個々の児童生徒に合わせた対応について、芦屋市障がい者スポーツ指導者協議会での活動に活かしていきたい。
			14	支援部	子どもたちに力をつけるため、子どもの実態を正しく把握する研修を行い、検査を含めた実態把握期間を設け、目標設定につなげる。	3.2	A	A	把握した実態に応じた目標の立て方が具体的にわかるような手立てを支援部から提示したい。	・学校での児童生徒の様子や先生方が考えている児童生徒の課題について共有したいと考えているので、今後とも連携をお願いしたい。 ・中学部から高等部への進学の際に、不安や不満をもつ保護者が多いように思う。中学部の時と同じ指導を望む保護者が多いが、将来のこと年齢のことを考えて高等部の指導が違うのは当然のことと思うので、そこに不安や不満を感じる保護者が多いと思うので、中学部と高等部が連携していることをもつと保護者に伝える必要性があると感じている。
			15	研究研修	児童生徒への理解を深め、適切な指導及び支援方法を身につけるための研修講座を実施する。	3.2	A		夏季休業中を中心に夏季研修講座・地域公開講座という外部講師を招聘し、児童生徒への理解を深める方法(応用行動分析等)について講演いただいた。	
			16		授業の充実を目指した「児童生徒が『わかって動ける、できる』授業づくり」をテーマに各部のニーズ及び児童生徒の実態に合わせた研究の充実を図る。	3.0	B		児童生徒の課題に応じた授業内容等を検討し、公開(研究9授業)を行った。また、各学部において互いに授業を参観できるよう工夫した。授業後も、授業の見直しや改善点を検討したり、研究発表会等を通じて共通理解を図った。児童生徒の支援及び授業の充実につながるように今後も継続していきたい。	
			17	保健	適切で効果的な保健学習を指導するために、教材・教具の充実を図り積極的な利用を進める。	3.1	B		各学部学年毎に必要なに応じて教材教具を作成・利用しながら保健学習を行うことができた。さらに積極的に教材を周知していきたい。	
			18	小学部	日常生活に必要なスキルの獲得を目指して、個々の実態に応じた目標と手だてを策定し、継続した指導を行う。	3.2	A		実態把握と保護者のニーズをもとに、目標と段階を踏んだ手だてを策定し、年度末に目標が達成できるよう継続した指導を行った。次の目標にスムーズに取り組めるよう、確実に次年度へ引き継ぎ、指導が継続できるよう図る。	
			② ③ ⑥	19	中学部	一人一人の実態を踏まえた学習活動を計画的に実践できるよう、クラス会議、学年会、学部会で共通理解を図る。	3.3	A		学年会を重視し、クラスおよび学年内の情報共有を行い、生徒理解と具体的な支援の方法を深められるよう検討を重ねた。学部会では毎回、生徒の情報交換の場を持つよう努めた。
②	20	高等部	毎日の3分間クラス会議や学部会での5分間討議、ケース会議や夏期研修を通して、チームで教育にあたるために対話のできる組織作りを行う。	3.2	A		クラス内で日々、情報交換、共通理解を行うことができた。学部内交流では学年、立場を超えて意見交換ができた。今後も気兼ねなく対話ができる環境作りと、生徒への迅速なフィードバックができるよう努めたい。			

IV 課題教育	③	21	進路関係の情報の迅速な共有を図るとともに、学部・学年と密接に連携・協力して進路指導計画を実践する。	3.2	A	A	進路関係の情報の迅速な共有を図り、学部・学年と連携・協力して進路指導を実践するよう努めた。次年度はより密接に連携していくことを目指したい。	学校自己評価及び総括は適切である。 ・進路について、とても改善されている。 ・進路指導については、進路だよりの内容を充実させる等保護者にわかりやすい情報発信ができています。今後も継続して欲しい。また、担任が進路指導部の教員と連携し、生徒一人一人に合った進路について、保護者とともに考え、相談に乗ってほしい。 ・進路指導については、進路だより等を通して保護者にもわかりやすく伝わっている。進路と日々の生活をぜひつなげてほしい。 ・卒業、進路にあたっては、計画相談員と共有する機会が多いので、今後とも連携をお願いしたい。
		22	進路通信、進路説明会、進路相談等を通して、保護者に分かりやすい情報発信を行う。単に情報を提供するだけでなく、子どもに合った進路を一緒に考える機会となるよう努める。	3.3	A	B	進路通信(全校、小中)、進路説明会(高、小中)、進路相談等を通して、保護者に分かりやすい情報発信を行ない、子どもに合った進路を一緒に考える機会となるよう努めた。次年度は更にこの方向で進めたい。	
		23	キャリア教育推進委員会 教員一人一人がキャリア教育を意識して日々の教育活動を実践するために適切な方法を検討する。また、並行して、小中高が連携して12年間を見通した学校教育にあたるための方法を模索する。	3.2	A	A	各学部で「卒業時に身につけておきたい力」を検討・集約し、各学部の共通項目及びそれぞれの特徴ある項目が見えてきた。来年度はこれらを整理して、各学部の卒業時の目標が一望できるものを作りたい。学部内で目標の共通理解を深めるとともに、他学部の目標への理解を図りたい。そして、目の前の子どもたちの今の目標を考える上で活用できるものにしていきたい。	
	④	24	交流及び共同学習推進委員会(小・中) 児童生徒の経験・活動の場を広げて社会性を培い、地域の人たちや子ども達に本校児童生徒がともに社会で生きる仲間であることの意識を育み、この教育に対する正しい理解と認識を深める。	3.2	A	A	(小)学校間交流では近隣校2校と継続して交流することで本校を知る児童も増えてきた。引き続き子ども同士の関わりができるよう内容を考えていく。居住地交流では地域児童に知ってもらう機会であり本校児童には普段できない経験ができるよい機会であった。昨年度から引率回数を制限しているが、低学年児童の交流が多く日程や時間帯など校内体制がとれるような工夫が必要である。交流校との調整が難しいが、交流がより充実したものになるよう密に打ち合わせする必要があると考える。 (中)学校間交流では、継続して2校との交流を実施することができ、お互いを知るよい機会となった。しかし、潮見中学校との交流は、前年度のように来校での交流は実施することができなかった。今後、より充実した交流を行うために働きかけていく必要がある。居住地交流は6名の希望者が実施した。行事や授業への参加方法や内容の打ち合わせを交流校としっかり行うことが今後必要である。	
		25	交流及び共同学習推進委員会(高) 相手校と連携して年間計画を作成し、推進委員会、教務部交流係を中心に進捗状況を確認しながら進める。特に「共同学習」の内容を深める。	3.3	A	A	相手校の担当者と月2・3回の打ち合わせを行いながら今年度も取り組みを進めることができた。新しい取り組みは特にしていないが内容的には良い意味で現状維持ができた。	